

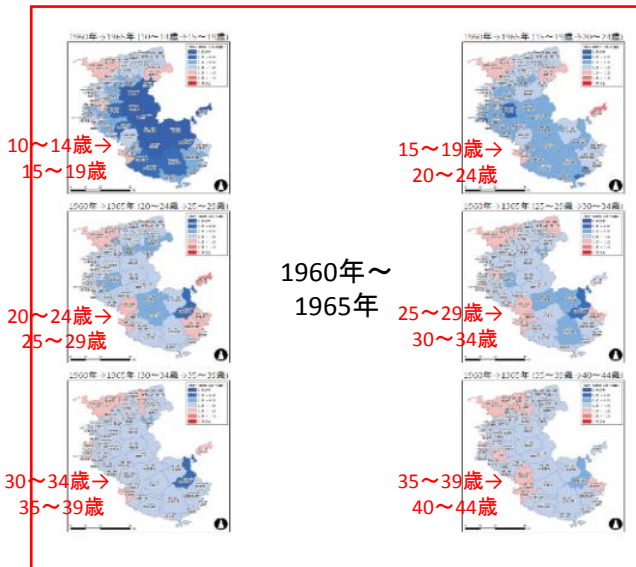
第5章 コーホート分析からみた50市町村別の人口増減の特徴

(一定期間内に生まれた集団の分析)

たとえば、5年前の20～24歳の人口集団が、5年たって25～29歳になった時の人口集団の増減比較を行う手法を、コーホート分析という。したがって5年前の20～24歳の集団が5年後そのまま出入りなしでその地に居住していれば、値は1になり、転出のほうが多ければマイナス、転入のほうが多ければプラスになるという傾向を、図化したものが以下の地図となる。

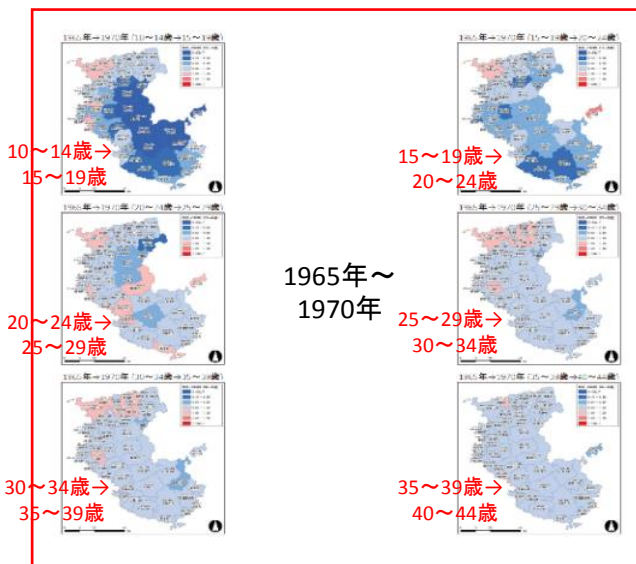
青いほうがマイナス、赤いほうがプラスとなっており、1960年～1965年からスタートして、2010年～2015年までの50市町村別の動きを図化している。注目すべき点は、ピンクから赤色の転入がみられる時期と年代層にある。以下各期における特徴を簡単に記している。

その動きの中で最も鍵を握る年代層として、20～24歳集団と25～29歳集団の動きについては、より詳細に拡大して全体分析の後に掲載している。端的に言えばこの年代層をいかにキャッチするかが人口動態を安定させる最大の貢献要因となっていることである。

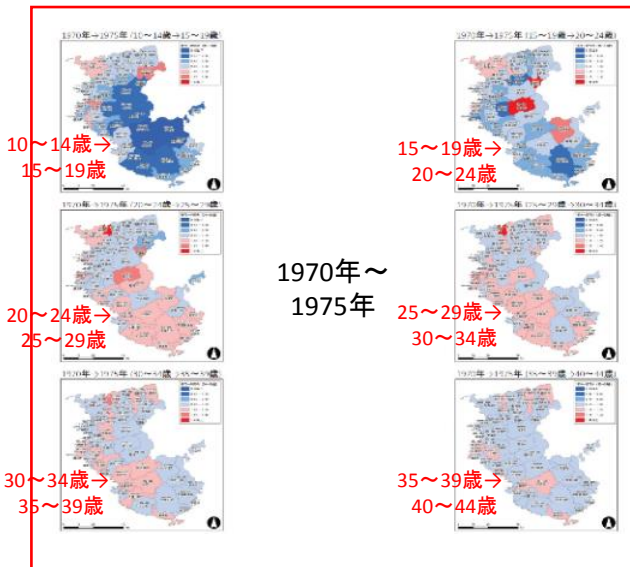


高度成長期が始まる時期において、中学卒業後の動向が中山間地域で多くの人口が転出し、和歌山市以外のところでそうした若年層を受け止めるところはほとんどなかった状況が見て取れる。

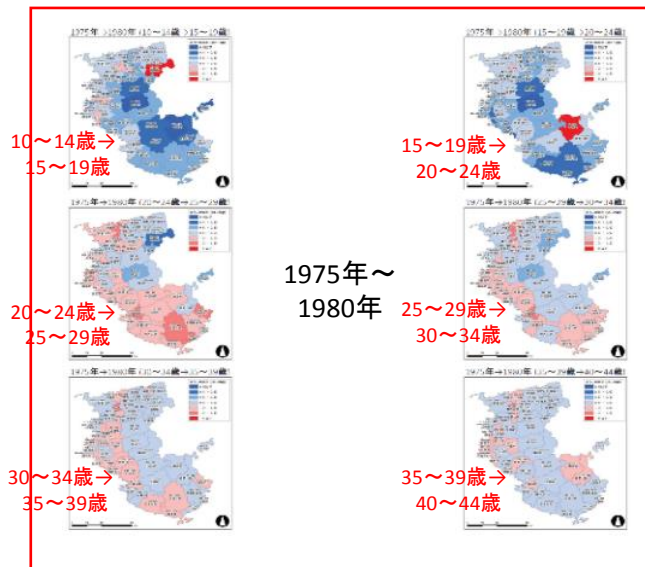
高野町は高校、大学で人口を吸引する独特の動きを示すが、以降ではその独特の転入状況については繰り返しては触れない。



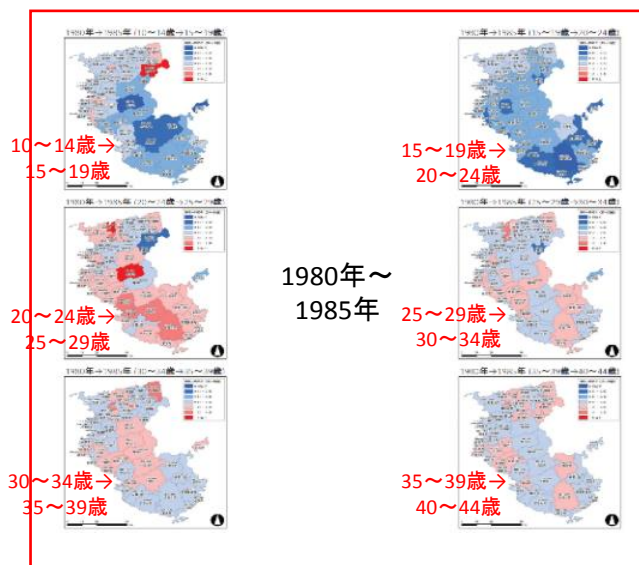
若年層の大量の転出状況には変わりなく、和歌山市や紀北や海岸部の都市でその幾分かを受け止めている状況が引き続きみられる。



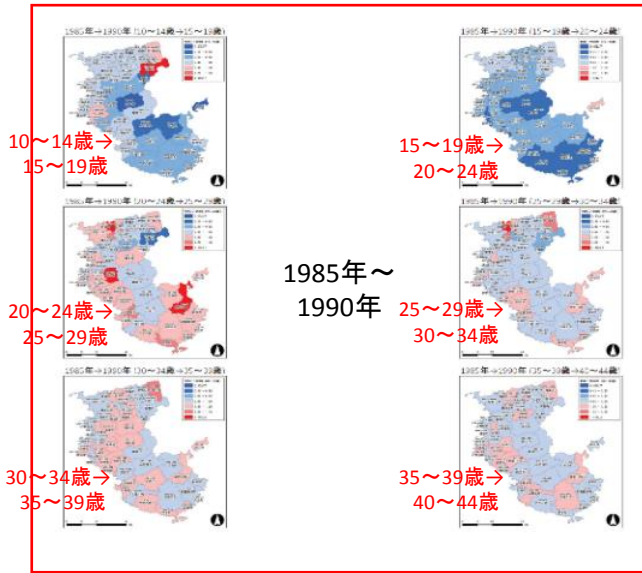
若年層の大量の転出状況に関し、少々転入も見られる動きが若干見え始めたのと、20歳以上人口の減少に歯止めがかかり、幾分増加し始めたところも、中山間地域でいくつか見られるようになった。



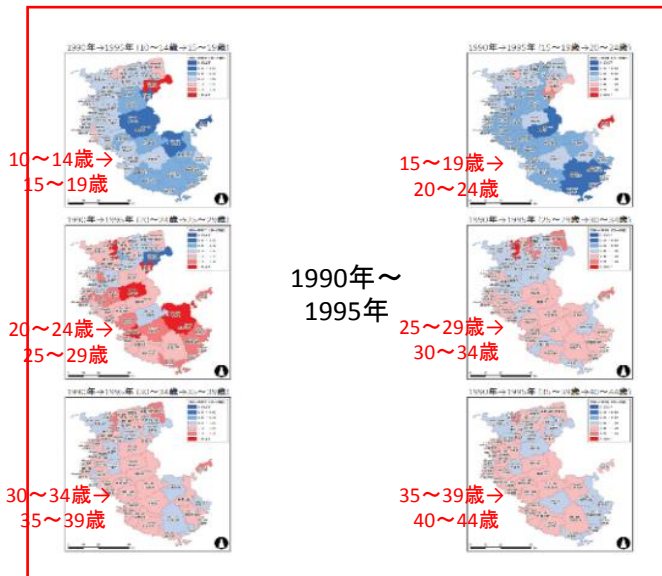
状況は前の期とあまり変わらないが、和歌山市のほうで若年人口の減少がみられるようになった。そして、20歳代の人口増が見え始めたことである。



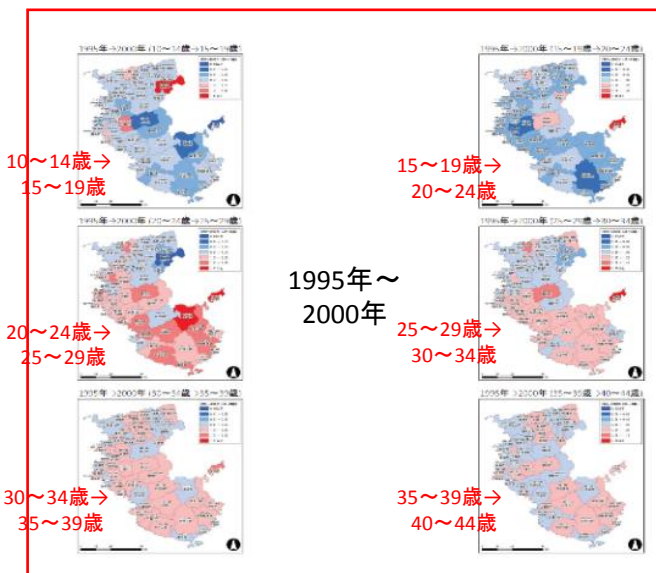
20歳代の人口増の動きがより強く見えるようになってきた。またそれ以上の年代層の動きもかなり安定化してきたといえる。



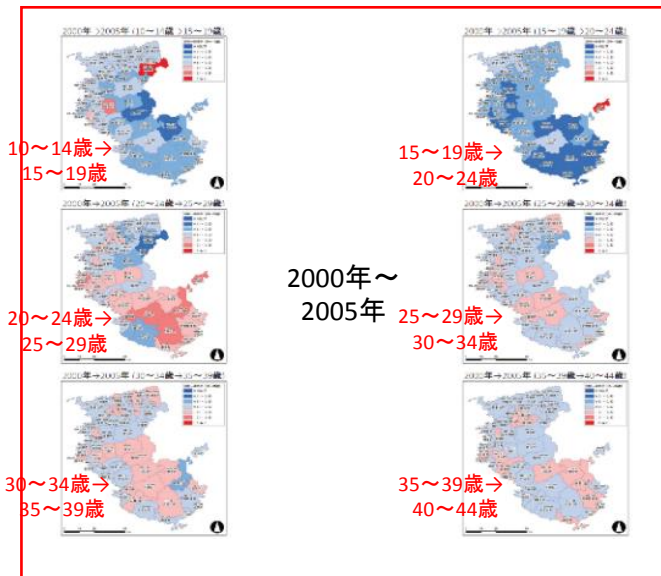
前の期と同じく、20歳代以上の人口増加が広くみられる状況が続いている。



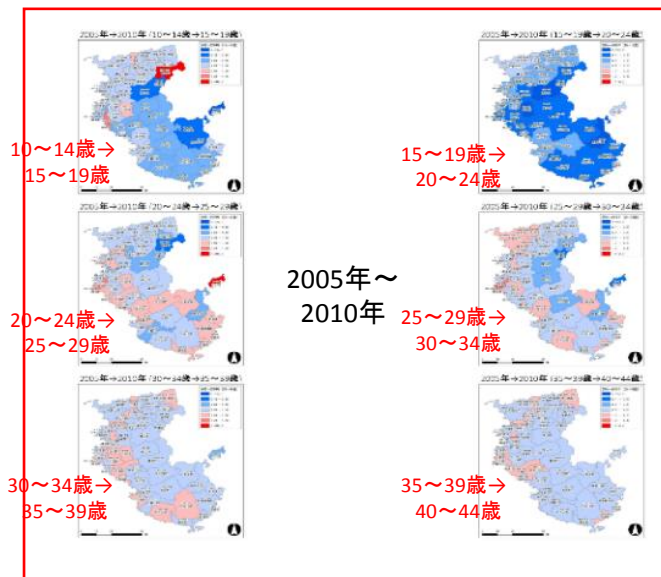
この期は、特に20歳代の人口増加の状況が顕著に表れた時期である。当該年齢集団の人口がかなり減ってきたので、増加率がより強調されていることもあるが、20歳代については、実数の変化も後述で図示しているの、そこそこの人数が、Iターンも含めて見られ、それ以上の年代も減少に歯止めをかけている状況が見て取れる。



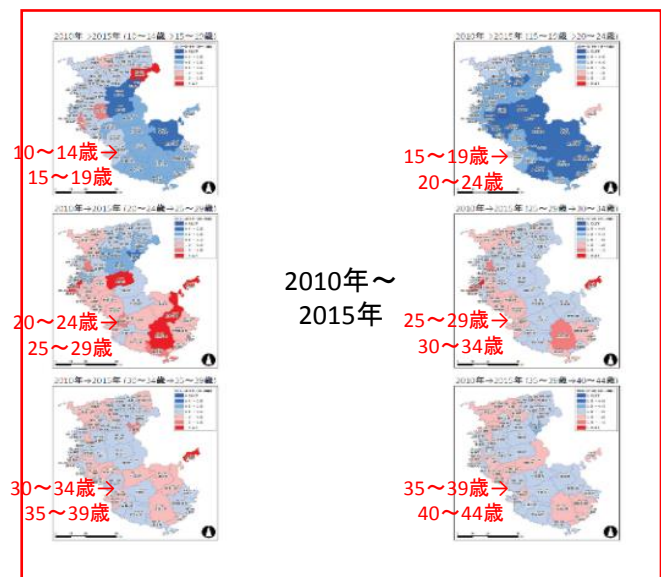
引き続き人口回帰の状況が見て取れるが、和歌山市において逆に人口が多く年代層において減少している状況がうかがわれる。



率的には若干20歳代以上の人口増が鈍ってきた感があるが、それ以上の層も比較的安定した人口動態を見せている。和歌山市のマイナス状況は継続したままである。



全体的に20歳代以上の人口増の勢いが収まった感があり、それ以上の年代層の減少が再びみられるようになった。

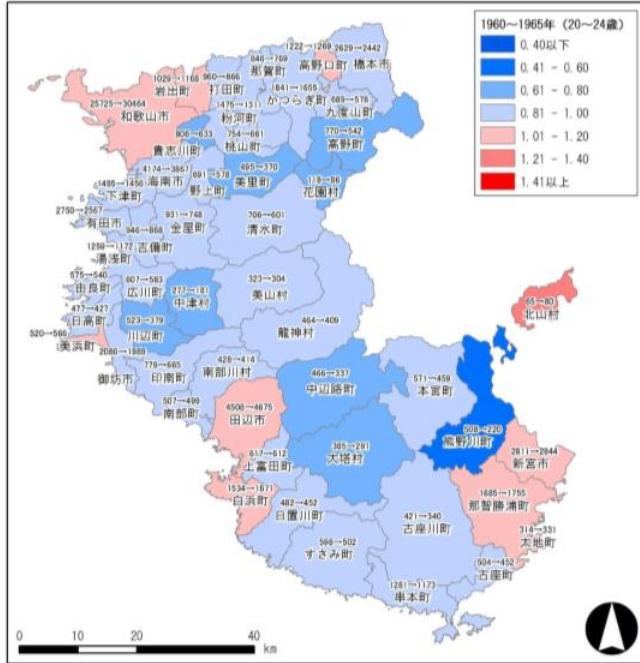


再び20歳代以上の人口増がいくつかの地域で見え始めてきた。ただ実数がかかり減ってしまった中での人口転入であるので、量的インパクトは小さいかもしれない。ただ図示することにより、ちょっとした人口増加でも、全体との比較などで、相対化され、また今後の人口推計にも影響を与えることになる。微細な人口の増減がその地の将来を語る時の賦活材料になることを期待している。

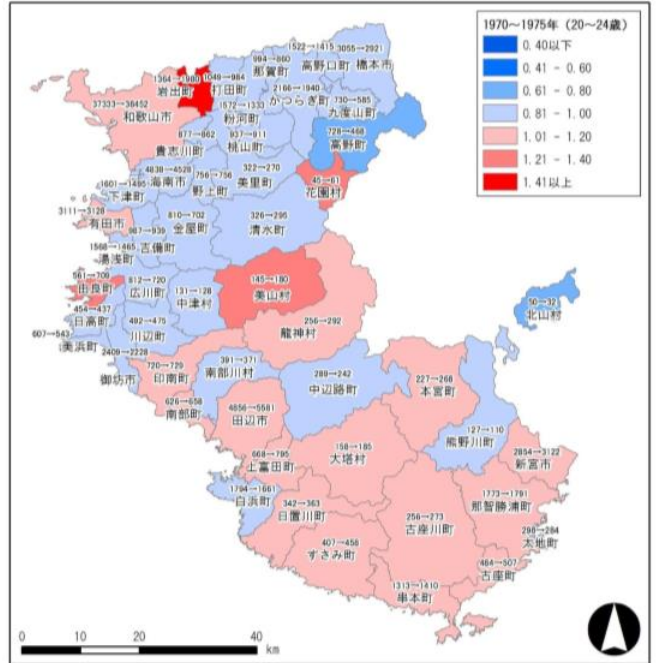
さらに拡大して、実数もわかる形で、20～24歳の人口集団が、5年たって25～29歳になった時の人口集団の増減比較を行ってみた。

最も重要な年代層であり、10歳代後半でいったん人口が減ったのち、どれだけの人数が20歳代になって、この地にとどまり、また転入があるかによって、どれだけの人口が増減するのかを知ることになる。どういう要因によって人口が増えたのかを確認することのなり、その地域の活力をはかる素材ともなる。赤系統の色について注目しながら、時期と場所、変化量を読み取っていこう。

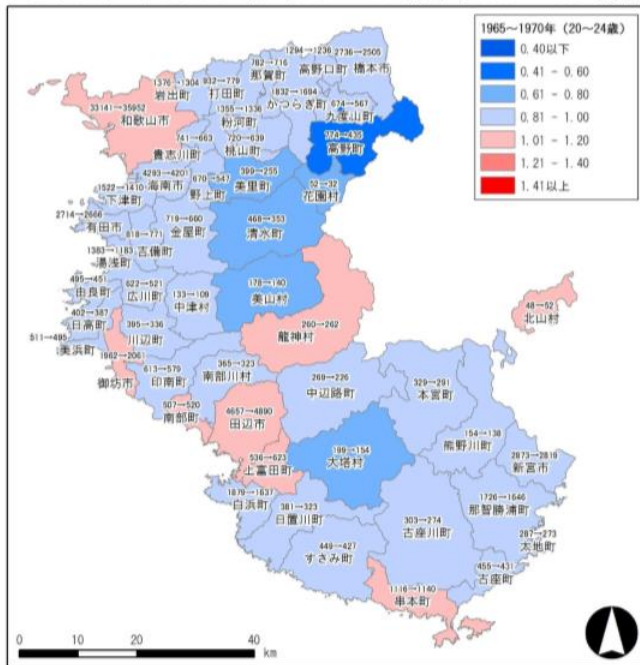
1960年→1965年 (20～24歳→25～29歳)



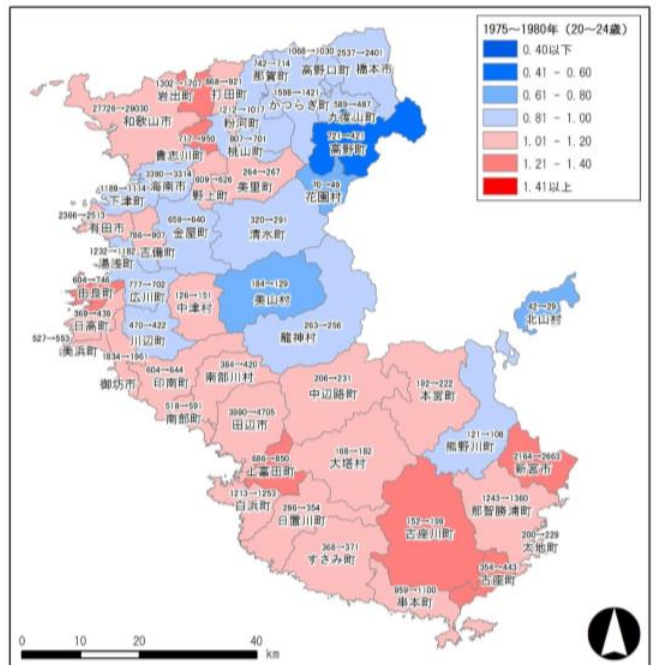
1970年→1975年 (20～24歳→25～29歳)



1965年→1970年 (20～24歳→25～29歳)



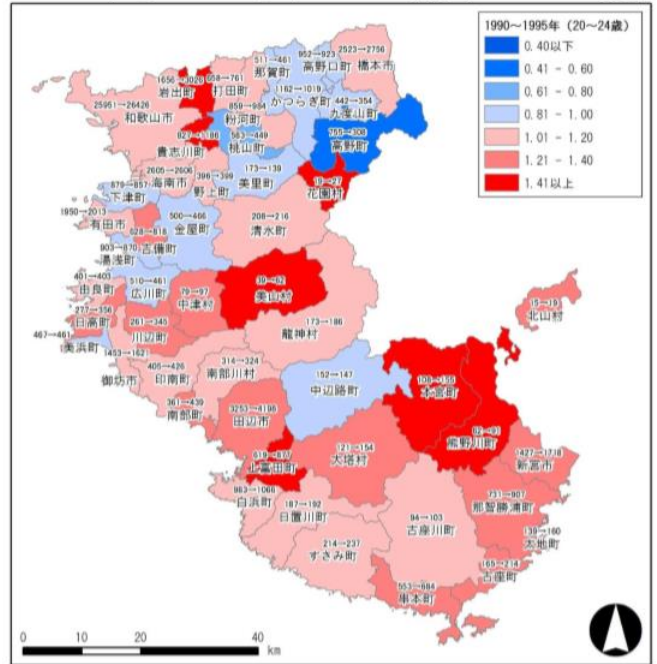
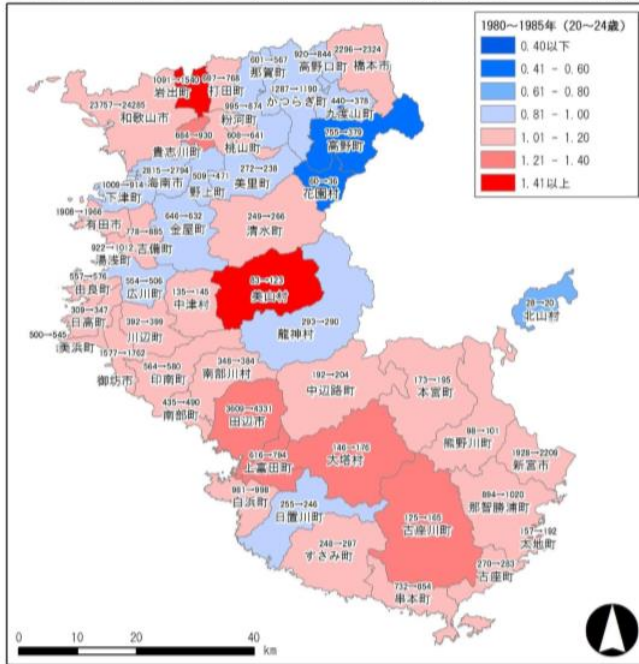
1975年→1980年 (20～24歳→25～29歳)



特に赤色の地域の動きに着目資料。1990年～1995年が人口回帰のピークとなっている。実数も見ながらその動きの要因をつかむことが重要である。

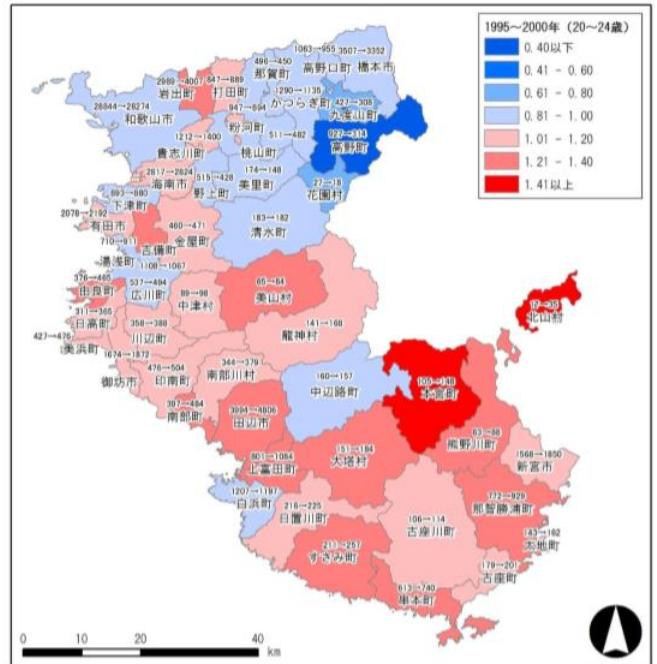
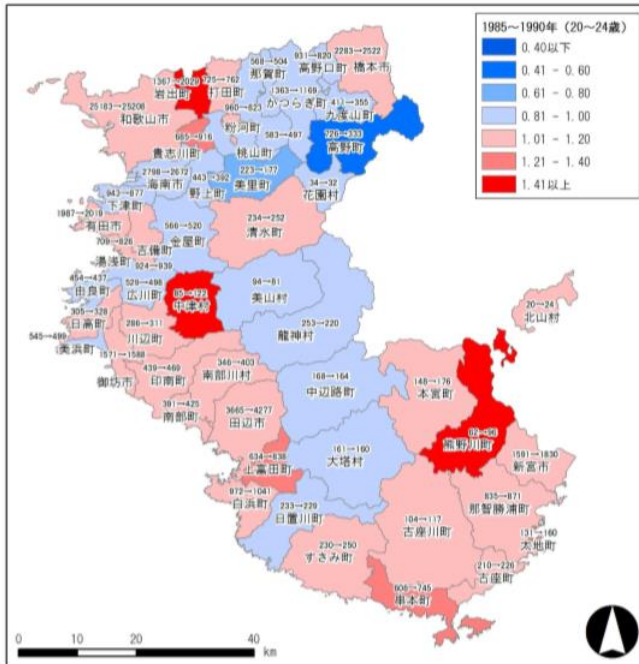
1980年→1985年 (20～24歳→25～29歳)

1990年→1995年 (20～24歳→25～29歳)



1985年→1990年 (20～24歳→25～29歳)

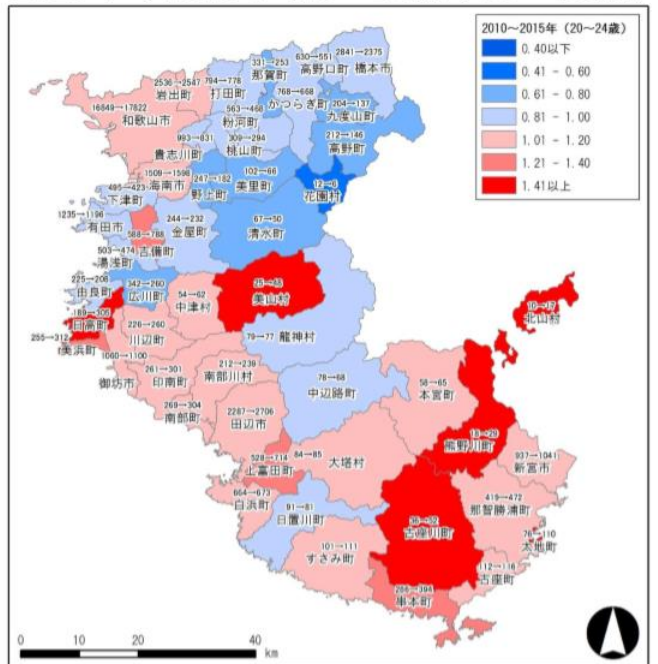
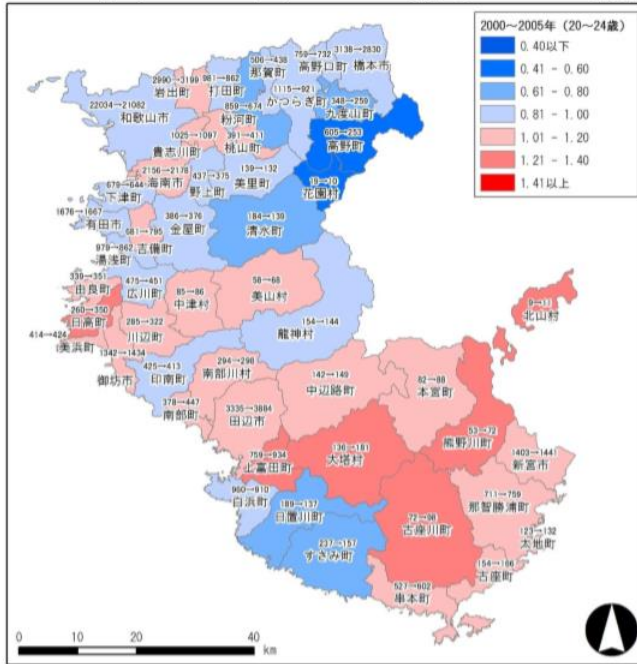
1995年→2000年 (20～24歳→25～29歳)



人口回帰の勢いが弱まっているが、最近年の動きには着目しておく必要がある。実数と比較しながら動きを確認しておきたい。

2000年→2005年 (20～24歳→25～29歳)

2010年→2015年 (20～24歳→25～29歳)



2005年→2010年 (20～24歳→25～29歳)

